

## 実践事例.05

プロジェクト・アドベンチャーで  
チームづくりを体感して  
ドラマケーションで表現を学ぶ

東京都立町田総合高校

2年生の総合選択科目で  
コミュニケーション授業を実施

町田総合高校は2010年に開校した都内9番めの総合学科高校。同校の総合選択科目は、「暮らし」「まち」「ひと」「自然」の4つの系列に分かれている。そのなかの「ひと」系列の指定科目になっているのが「コミュニケーション」。2年生を対象に年間70時間、2単位の授業を展開する。実施日は、毎週木曜日の1・2時限め。

「人とのかわり方をもっと広げ、人と人との関係において心の使い方や気持ちを含み取る力を伸ばしたい。そう考えて、2010年の開校に際し、コミュニケーションスキルをアップさせる授業を設けたのです」とは、同校の開設準備室のメンバーとしてこの授業を考え、実施してきた体育科の山室俊浩先生。

「コミュニケーション」の授業は、家庭科・福祉科・体育科の3教科の教員が分担して受けもつ。家庭科が担当する保育の現場体験と、福祉科が担当する高齢者や障

がい者施設などの訪問、そして体育科が担当するプロジェクト・アドベンチャーとドラマケーションに大きく分かれる。

前期に家庭科と福祉科の授業を受け、逆た生徒は後期に体育科の授業を受け、逆に、前期に体育科の授業を受けた生徒は後期に家庭科と福祉科の授業を受ける。さまざまな人としだいにコミュニケーションを深められるので、生徒の人气が高い。

「2年生は全部で240人いるのですが、そのうち100人がこの授業を選択します。志望者ももっと多いのですが、マンパワー的に100人が今のところ限界で、将来的に保育士や介護など人とのコミュニケーションが重要な仕事をやってみたい生徒を優先しています」

仲間を信じ、自分を信じる  
「コミュニケーション」

このなかで特に今回は、体育科のプロジェクト・アドベンチャーとドラマケーションのプログラムを取り上げたい。

プロジェクト・アドベンチャーは、冒険(アドベンチャー)をテーマにした体験学習。道具やからだを使いながらチームでさまざまな課題解決やコミュニケーションを体験していく。

ドラマケーションは、ドラマとコミュニケーションの合成語で、文部科学省委託事業としてドラマケーション普及センターが実施している演技や演劇を通して「コミュニケーション能力と表現力を高めるプログラム」。「仲良くなる、からだを感じる、コミュニケーションを楽しむ」という4つの要素を、さまざまな遊びを通じて体感していくもの。

「特に課題解決型のプロジェクト・アドベンチャーでは、嫌でも意思疎通を図っていくことが必要になります。目隠しやからだを相手に預けるなど、他人を信頼しないとできないものもあります。そういう体験とともに毎回の振り返りによって、自分自身のコミュニケーションの気づきや人との関係をつくる楽しさを実感するのです」

実際に、プロジェクト・アドベンチャーの振

## 町総コミュニケーション授業のグランドルール

以下のルールを、毎回授業の際には確認し、振り返りシートにもできていたかどうかを問うことを徹底した。

## &lt;本気(マジ)で&gt;

目の前の出来事、問題から逃げずに、できる・できないを考えるのではなく、すべてのことに全力で挑戦しよう。

## &lt;みんなで&gt;

ひとりで悩まない。チーム全員で挑戦しよう。

## &lt;安全に&gt;

安全(身体)、安心(心)な環境で挑戦できるよう、自らその環境をつくろう。

## &lt;話す&gt;

上手に話さなくていい。自分のペースで、自分の話したいように話してみよう。正直に素直に話そう。

## &lt;聴く&gt;

真剣に聴こう。耳だけじゃなく身体、心、全身で聴こう。同調しなくていい。「?」と思ったことはそう伝えよう。「!」と思ったこともそう伝えよう。内容以外のメッセージも聴く。どんなふう話しているのか、声のトーン、表情なども聴こう。



主幹教諭  
山室俊浩先生

## School Data

2010年創立/総合学科/生徒数708人  
(男子248人・女子460人)/進路状況  
(2012年度実績)大学36.9%・短大9.2%・  
専門学校35.4%・就職1.5%・その他17.0  
%

り振り返りレポートの内容を見てみると、半年間で生徒が大きく変化している様子がよくわかる(25Pコラム参照)。コミュニケーションの土台となる人間関係づくりにおい



ドラマケーションの授業で「表現」を楽しむ生徒たち

### ■ 体育科の授業を半年受けた 2年生A子さんの振り返りの変化

※毎回の授業後の振り返りシートの感想欄から抜粋

4月26日

今まで私は、どうやら相手との話がはずむかなど、相手中心にいつも考えていて、私というものに主体性がなかったなど、今回のアクティビティを通して感じました。相手中心に考えることが悪いことではないのだけれど、私の気持ちや意見を無視してしまっていたなと思います。

5月10日

自分でも気づかないうちに、気持ちを言葉にできていたり、うまくは伝えられなくても大丈夫だと思えたら、自然と相手と話せていた。正直、こんなに早く自分が変われるとは思っていませんでした。あと、聴くということも、私のなかで変わってきていると思いました。

7月12日

身構えて相手を探るようなコミュニケーションでは、良い関係はつくれません。私は自分の考えや行動を否定されるのが怖くて、今まで人と話すときは距離を置いていました。でも、今回の授業では、自然と自分を出せたような気がします。確かに否定されたら嫌だなという気持ちもありますが、それ以上に人と話したり、人と考えをぶつけ合うことが楽しいと思うようになりました。

7月19日

スパイダーウェブは正直なところやりたくないなあと最初は思っていました。自分が持ち上げられるなど、どうしても怖さや体重が気になってしまふからです。しかし、みんなが協力して持ち上げてくれて、すごく安心しました。特に男子がヒョイと持ち上げてくれたときは、最初に心配していた怖さなどが消えて、私も頑張らなきゃと思いました。それと同時に、やっぱり人とかがわって、何か難しいことを乗り越えていくのは、楽しいなと思いました。

※スパイダーウェブとは、くもの巣に見たてたロープのすき間を仲間で協力しながらぐり抜けていくもの



プロジェクト・アドベンチャーに入っていく前に、グラドルールの確認とともに、「言ってほしい言葉」「言ってほしくない言葉」「してほしい行動」「してほしくない行動」を書き出し、「気づきの記録」をセンターの円に書いたもの。その後の活動の指標ともなる。

て、他者から受け入れられる実感とともに、「自分もできる」という小さな自信が芽生えているようだ。

**プロの俳優に刺激されて  
表現を楽しむドラマケーション**

また、体育の教師だけが指導を行うのではなく、外部の講師がやってきて指導してくれるドラマケーションを、前期後期それぞれに4回ずつ組み込んでいく。このプログラムを活用しようと思ったのは、山室先生がちょうど町田総合高校の設立準備室で授業を考えていた際、教育指導に関する雑誌で紹介されていたのがきっかけ。

「プロジェクト・アドベンチャー以外のものも行うと、プログラムに変化が生まれていいなと思ったんです。しかも、からだを動かしながらのコミュニケーションということで共通するものもありました」

例えばチームで1台の車になってドライブするというような課題。タイヤになる人、ハンドルやボディーを表現する人など、それぞれが工夫を凝らして車になってみる。「表現」を中心としていく中で、自分を伝えることが苦手な生徒にも効果があるのではと期待している。

「表現の場面で恥ずかしがる生徒は多いのですが、プロの俳優さんの迫力に後押しされてけっこうみんな楽しんでやっていますね」

最終日には2分間スピーチを全員の前で行う。歩き方や立ち方、人前でみんなに聞かせるということはどういうことを考え、自己表現で締めくくるとの。

「プロジェクト・アドベンチャーではチームのなかでの振り返りを行い、ドラマケーションでは人前で自分を出すということを意識する。この両者のバランスがちょうど良い組み合わせになっていると思います」

1年間を通じて「コミュニケーション」の授業を体験した生徒の変化は、意外なところにも発揮されている。

「この授業を受けた2年生の廊下がにぎやかになりました。生徒たちが気軽に互いの教室を歩き来したり、あいさつしたり。また、体育祭の応援団練習のとき、この授業を受けた生徒たちは1年生を乗せるのが上手でした。相手の気持ちを考えて、こんな言葉を言われるとうれしいということが身についたからだと思います」

**実践のポイント**

**外部講師の報償費を  
いかに調達するかが大切です**

◎外部との連携の授業でポイントとなるのはどんなことでしょうか？

講師として外部から来ていただくので、

やはりその報償費をどこから調達するのかが大切ですね。

本校の場合、1年めは学校の立ち上がり時期だったので、都からさまざまな補助もあり講師費として確保できました。ですが、2年めはそれがなかったため、文部科学省の「芸術表現とコミュニケーションの授業」に応募し、そこから出すことができました。3年めの今年、本校が言語能力向上推進校になっているので都から多少の補助があり、それを利用することができました。

今後については、東京都の生涯学習課に外部との連携を推進するための補助があるため、それに応募したいと考えています。このプログラムが、1日だけ外部から人を呼んでくるというのではなく、授業として年間を通じて展開しているの、そういう補助も受けやすいという面はあるようです。(山室先生)